

精神疾患のある患者の在宅血液透析(HHD)導入と在宅支援への取り組み

医療法人衆和会 長崎腎病院

○吉田衣里子 白井美千代 丸山祐子 藤原久子 船越哲

【背景】

うつ病の我が国の有病率は 2-4%であるのに対し、透析患者では 15-60%という報告もあり、注意深い対応が必要である。今回は、複数の精神疾患に罹患した患者の在宅血液透析導入の経過と、看護師の役割について経験したので報告する。

【対象】

48 歳代、女性、独身、両親と同居。14 歳頃より摂食障害、うつ病の診断を受けた。腎不全が徐々に悪化したものの、被害妄想や自殺企図もあり、当初維持透析は極めて困難との判断であった。母親は非常に熱心であり、心不全症状が悪化し在宅透析を目指す方向で透析を導入。在宅透析移行目的で当院に転入。

【結果】

個別の教育プランの見直しや対応スタッフの限定など患者に合わせ精神的負担を軽減させ在宅透析移行を実現

【考察】

当初の目的であった在宅血液透析は実現した。しかし精神状態は不安定なことも多くみられ本人と介助者のストレスが高まる時もあった。介助者も高齢で在宅血液透析の継続または中断の可能性もあり将来的な支援の方法も併せて検討していく必要がある。